



帰りの飛行機から見えた
富士山の夕景

第十回四国あるき遍路の旅

なつかしの徳島へ

第11回四国あるき遍路の旅は、初めて四国に降り立った徳島空港から始まった。第1回から第3回、そして今回が4回目の徳島空港である。

空港からリムジンバスで、吉野川を渡ると程なく徳島駅。休んだことのある駅ビルのベンチ、用を足したトイレ、売られているみやげ物など、一つ一つが妙になつかしく感じられた。

阿波池田に向かう列車のホームに出ると、このホームから一番札所へ行き、難所焼山寺へ行き、また鶴林寺・太龍寺へも行った、と思い出される。

吉野川沿いに走る列車の車窓からは、一番札所から十番札所までのお寺を山裾に並べる山並みが右側に眺められる。途中の小さな駅は、徳島に戻るときに来た駅。待ち時間に入った駅前の



レトロな喫茶店もまだあった。昭和40年代から50年代のままの喫茶店は、もう二度と来ることがないだろうといいながら、渋みのきいたコーヒーを飲んだ店である。特急の車窓から見た喫茶店は、最初の頃の四国へんろだけでなく、一気に学生時代まで思い出させてくれた。

川島駅を過ぎると、はじめての風景となり、今回の遍路はどんな旅になるかと、時間は今に戻された。

「雲辺寺口」へ

一日2便の川之江
行きバスに乗る。



列車を降りた阿波池田は、山びこ打線で甲子園を沸かせた池田高校のふるさどである。駅のまん前から、田舎町に似つかわしくないアーケードのかかった商店街がある。かつて池田高校が甲子園で優勝したときにはここをパレードしたのだろう。

駅前ですし早めの昼食をとって、日に2本しかない路線バスで、雲辺寺口の停留

所を目指す。バスは、左右山に挟まれた谷を通って、愛媛県川之江へと峠に向かう。川之江は、前回帰路の高速バスに乗ったところだ。いよいよ前回の遍路の続きへ近くなり、四国一周の線がつながることを実感する。

阿波池田駅を出て、30分弱で「雲辺寺口」バス停に着いた。左右を山に挟まれた谷はかなり細くなっていて、バスを降りたらいきなりの登りは避けられそうもない。さあ登るぞ、とばかりに次から次に遍路が谷底に降り立った。

第1巻 第1号

平成18年5月15日

目次:

六十六番雲辺寺	2
六十七番大興寺	5
六十八番神恵院 六十九番観音寺	6
七十番本山寺	7
七十一番弥谷寺	8
七十二番曼荼羅寺 七十三番釈迦寺	9
七十四番甲山寺	10
七十五番善通寺	11

四国へんろ最後の難所

雲辺寺口バス停を降りると、いきなりの登りとなる。早朝に千葉を出発して、飛行機・バス・電車・バスと乗り継ぐ移動ばかりだったところに、いきなりの登りである。しかも、道下さんのことばを借りれば、「前をいく人の尻がちょうど目の位置に見えるほどの急な上り」である。それまでの旅行気分から、一気に遍路気分引きつり込まれた。一同無口になり、自分との対話を始める。自分と対話するには山道はありがたい、それも急なほどありがたさは増す。平坦な道では、無口になり自分との対話をはじめるのはかなり歩いてからで、その意味では山中の遍路道にこそ、遍路の醍醐味があると言える。

高速道路をくぐると、うっそうとした山の中に入る。晴れていて幸いである。これで雨でも降られたら、松尾峠をしのぐきつさだろう。

うっそうとした山を抜けると、畑のほりに出た。こんな高いところで、人の手が入っている畑に出くわすと、今度は一気に娑婆の世界に引き戻される思いである。道は舗装道路となり、平坦となった。雲辺寺は標高千メートル近い高所にあるというので、いつまた登りがはじまるかと疑いつつ歩いていく。

道端に汚い雪の溶け残りを見つけたら、すぐ先に雲辺寺の仁王門が見えた。仁王門前で、福田さん張りの腹をした羅漢さんが迎えてくれた。境内の上からは、先に到着したみんなが余裕の笑顔で出迎えてくれた。三十分は遅れたのだろうか、そんな余裕の笑顔で迎えられても、こっちはようやくたどり着いたところで、笑顔を返せるほどの余裕は持ち合わせていなかった。

六十六番雲辺寺

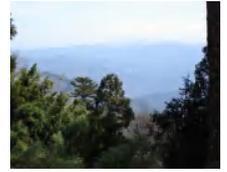


雲辺寺は山上の大伽藍である。故に、麓からはロープウェイが架かり、観光客は労なくしてこの山上の大伽藍にお参りできるようになっている。ロープウェイは全長2600メートル、所要時間7分。我々は4.2キロメートルの山道を何時間かけて登ったのだろうか。

標高927メートルにある雲辺寺は、八十八ヶ所中最も高いところにある札所で、「四国高野」とも呼ばれるそうである。仁王門・本堂・大師堂、そして鐘楼、大きな信徒会館もあるが、宿坊はやっていない。

前をいく人の尻がちょうど目の位置に見えるほどの急な上り





雲辺寺から四国山地を望むと、遠く雪を冠した山並みが見えた。今年の雪の多さを物語っている。

残雪の大師堂

本堂でお参りを済ませ、大師堂に行くと、お堂の脇には残雪の山があった。霊場の靈気ではなく、冷気がただよっている。山道を登ってきた体に心地よい冷気である。

全員で般若心経を読んだが、春まだ浅い2月末、団体の遍路もおらず、今年最初の団体での般若心経だったかもしれない。山上に般若心経が響き渡った。

境内を後にしようとする、身動きしない団体が目に入った。ユニークな五百羅漢の石像だった。五百羅漢に見送られて、雲辺寺を下りることになった。

大師堂で般若心経を読む。お堂の傍らに、残雪が見えている。



「雲辺寺遍路」
 笹倉 邦康作
 村 里 紅 梅 日 毎 新
 登 攀 遍 路 息 肩 頻
 讚 岐 名 利 雲 辺 寺
 境 内 鶯 声 慰 旅 心

(読み下し文)
 村里の紅梅日毎に新しく
 登攀の遍路息肩(休息)頻なり
 讚岐の名利雲辺寺
 境内の鶯声に旅心を憩う

難所は下りにあると知るべし

急な斜面に置いた秋元さんのリュックは、おむすびころりん、すってんてん。ねずみは拾ってくれず、自分で拾いにいったそうなの・・・。



雲辺寺からの下りは長い。調べてみれば、上りの雲辺寺口バス停は標高300メートル、雲辺寺までは約600メートルの登りである。標高900メートル強の札所から、標高70メートルの平地まで標高差800メートル以上を一気に下るのである。途中の尾根を除けば下りっぱなしである。この下りは、自分の体重を支えなければならず、ひざは笑い出し、腿の筋肉は悲鳴を上げ始める。ベンチで腰を下ろし、変なところにリュックを置けば転げ落ちてしまうほどの急なところもある。まことに、下りは難行である。経済も右肩上がりは楽、人生も現役を引退してからの下りは難しそうである。

そのきつさのせい、この下りでの写真は極端に少ない。写真どころではないのである。這這の体で麓までたどり着き、時間の許すところまで歩いてタクシーに分乗して、今夜の宿「観音寺荘」に旅装を解いた。



くたびれ果てた

〇〇の男一号



期日	曜日	コース予定					食事・宿泊		
1	2月25日	土	6:50	SKY251	8:05		空港リムジン	昼食は道中にて。	
			羽田空港集合	羽田空港発	徳島空港着	徳島空港発	20分くらい	宿泊：かんぼ「観音寺荘」 〒768-0031 観音寺市池之尻町1101-4 ☎0875-27-6161	
			JR徳島駅着	JR徳島駅発	阿波池田駅着	阿波池田駅発	せとうちバス		
11:35	特急剣山3号	14:30	一徒歩一	途中からタクシー分乗					
雲辺寺口バス停着	約4.2km(山登り)	66番雲辺寺	雲辺寺発	約4.5km(山道下り)	「観音寺荘」着				
2	2月26日	日	7:45	一徒歩一	8:30	9:15	一徒歩一	11:15	
			観音寺荘発	約3km	67番大興寺	大興寺発	約9km	68番神恵院	昼食は道中にてうどん
			13:00	一徒歩一	14:00	14:45	一徒歩一	本山寺着	宿泊：いやだに温泉 〒767-0031 三豊郡三野町大見74 ☎0875-72-2601
			69番観音寺	約5km	70番本山寺	本山寺発	約 km		
15:12	JR予讃線	15:29	一徒歩一	時間があれば、71番弥谷寺の参拝を済ませる。					
本山駅発	17分	詫間駅着	約3.6km	いやだに温泉					
3	2月27日	月	7:00	8:00	一徒歩一	8:10	8:45	昼食は道中にてうどん	
			起床	朝食	いやだに温泉発	約200m	71番弥谷寺		弥谷寺発
			一徒歩一	9:45	10:30	一徒歩一	10:40		11:15
			約3.5km	72番曼荼羅寺	曼荼羅寺発	約400m	73番出釈迦寺		出釈迦寺発
			一徒歩一	11:45	12:15	一徒歩一	12:45		13:15
			約2.2km	74番甲山寺	甲山寺発	約1.6km	75番普通寺		普通寺発
一徒歩一		14:11	14:17	琴平出発まで、金比羅山神社を参拝して下さい。	15:15				
普通寺駅に向かう途中昼食	普通寺駅発	琴平駅着	ANA638	琴平駅発		夕食各自			
タクシー分乗	16:00	16:45		17:55					
高松空港着	高松空港発			羽田空港着		到着後、解散。			

2日目

讃岐路のはじまりは、雨。



2日目からはいよいよ讃岐路である。雲辺寺の住所は、徳島県三好郡池田町なのだ。

昨晚の宿「観音寺荘」から雲辺寺山に向かい少し戻らなければならない。田んぼにはさまれた道を行くと、山は雨に煙っていて、肌寒い。歩きだからいいものの、じっとはしてられない寒さだろう。

雲辺寺からの遍路道に合流して、少し歩くと六十六番大興寺の裏に出る。裏口から入るのは失礼なので、坂を下って正面から入ることにした。坂を下り始めると、ももが痛い。昨日の下りのきつさが、宿の温泉ぐらいではとれていないのだ。ともすれば、自分の体重を支えきれずに、ととととと前に行きそうになるのをこらえながら、なんとか坂を下り終えた。日ごろの運動不足と体重の増加に反省しながら、仁王門前を出た。鎌倉時代の仁王像というが、仁王門の先にある急な石段に目が行き、ろくにお参りもせず残念。

本堂前にたどり着き、お参りをしようとしたら、



アマチュアカメラマンが写真を撮ってよいかという。大興寺までの間、我々の前後を白い軽自動車がちよろちよろしていたが、その人だった。お遍路さんが札所に着いたら、まずお経を読んでのお参りが先だろうことくらい、四国人の常識だろうと、やんわりお断りした。敵もさるもの、お坊さんの格好はいいが、後ろの人たちの格好が今ひとつだから撮ろうかどうかどうしようかと思っただと、余計なお世話である。格好ばかりの団体バス遍路とは訳が違う。雨音を打ち消すように、大きな声で般若心経を読んだが、同時にカメラマンの雑音をも消した。

庫裏の門の脇に、ふくろうが飼われていた。石段脇のくすのきに巣食っているふくろうのひなが、巣から落ちたのを助けてやったのだという。近づくと、じっとこっちをみている。これで羽が黒かったら、網代笠を取ったわが身と似ていると思った。ふくろうもそう思ったらしく、目を丸くしていた。



上は、ふくろうの幼鳥。下は、黒ふくろう？



一度に2ヶ寺

大興寺の裏口を出て、観音寺市街へと向かう。依然として雨はそぼ降っている。次は、六十八番神恵院と六十九番観音寺とが一ヶ所にまとまっている珍しい札所である。そこまで、約九キロ、山裾から田園地帯を抜け、市街地を越して、「銭形」で有名な「琴弾公園」、海のほとりまでの平坦な道である。途中、道端の小さなお寺の縁側を借りて小休止する。雨の日に、腰を下ろして休める場所にありつけるのはなによりだ。お寺の名前も知らずに休んだので、お礼の気持ちでパソコンで調べてみると、「心光院」というお寺だった。

どこかでこんな機会もあるかと、きのう阿波池田駅前を買った、「安宅屋」(あたぎや)の「ちゃん太」というゴム風船入りの羊羹をみんなに配った。創業明治25年、なつかしい味がした。

道は市街地に入った。だんだん前の人たちとの距離が開いていき、観音寺駅そばの踏み切りに足止めを食らい、その差はますます開いてしまった。道に迷わないかと心配になったが、そこはもう十回も四国を歩いているベテラン遍路、その上道するべがきちんとしている。すでに、先を行く遍路は視界から消えてしまった。

ようやく遮断機が上がり、歩き始める。街中の川を渡ると、「大平正芳記念館」があった。そこを過ぎると直線になったが、前方に健脚遍路は見えない。もう、札所に着いているのでは、など



と思いつついくと、交差点の左のほうから先に行ったはずの健脚遍路のトップが歩いてきた。「急がば回れ。」というのは、足の早い人はわざと遠回りして、遅い仲間と歩調を合わせろということだと気づいた。再び一団となって、神恵院に着くことができた。

境内に入ると、団体バス遍路といっしょになった。雨も降っており、お堂の前はラッシュのような混雑だった。お参りを終えて、裏山に足を伸ばすと、展望台から琴弾公園の「銭形」を一望することができた。瀬戸内の海は雨に煙っており、海に浮かんでいる島々を見ることはできなかったが、雨にぬれた銭形と松の翠は落ち着きがあり、よい趣だった。

腿の筋肉痛を我慢しながら、琴弾八幡宮の石段を下り、財田川浴いを七十番本山寺を目指すことにした。雨も上がったようだ。



「銭形を見た人は長生きし、お金にも不自由しない。」





さぬきうどんにありつく。

観音寺市内を流れる財田川を七十番本山寺に向かってさかのぼる途中に、「本場かなくま餅屋」といううどん屋さんがある。「かなくま」は、鹿隅と書くこのあたりの地名だそうで、昭和30年ごろまでは、山から鹿が下りてきて財田川の水を飲んでいたので。店の前の橋を渡れば市街地となっている現在では想像もできないことだ。この橋も昔はなく、渡し舟で川を渡ったそうで、この店は船着場の茶店だったのだろう。

店に着いたのは一時前後だったと思うが、お客さんがひっきりなしに出入りする地元の人気店のようだ。もともとは餅屋さんらしく、店の名物は「ぞうにうどん」。しかも、讃岐では餡入りの餅が定番なのだそうだ。さすがに餡入りは遠慮して、餡なしの丸もちが入ったぞうにうどんを食べた。空腹と寒さのなか、うまさ十分、食べごたえも十分だった。

堤防沿いの遍路道に戻ると、先の方に五重塔が見える。札所はまだ先と思っていたが、思いのほか本山寺は近い。

七十番本山寺

本山寺は、仁王門・阿弥陀堂・大師堂・十王堂・五重塔・本堂と、立派な伽藍の札所である。本堂は、鎌倉時代に建てられたもので、国宝に指定されている。

境内に真新しいつるべ井戸があり、皆むかしを懐かしんで、水を汲んでみたり、覗き込んだりしていた。

本山寺から七十一番弥谷寺までの約11キロ。歩けない距離ではないが、宿に入る時間が遅くなるので、本山駅から詫間駅まで電車で移動することにした。普段は、電車にしろ、車にしろ、とにかく早く早くと生活しているが、四国で電車に乗ると、その速さに驚かされ、その速さについていけず、そんなに急がなくてもいいだろうに



とってしまう。歩き遍路にはあわただしい乗り物に化してしまうのた。





3 日目

弥谷寺門前、弥谷温泉

詫間駅から歩くこと、約1時間。道路標識の距離表示に惑わされながら、七十一番弥谷寺もお参りできるかもしれないと思いつつも、最後の急な登りで断念。弥谷温泉に旅装を解くことにした。

弥谷温泉は、今はやりの温泉施設で、そこに宿泊施設が設けられている。隣には、遊園地や老人施設などもある。広い駐車場は、入浴客の車で満車状態。館内に入ると、カラオケルームあり、食堂あり、マッサージルームもあり、地元の娯楽施設のようだった。



温泉で疲れを癒し、夕食はわれわれだけの広間で食べた。「アントニオ・せいすい」さんも登場し、マジックディナーショーで、しばし温泉旅行気分を味わうことができた。

七十一番弥谷寺

弥谷寺はすごい。朝、参道入り口に建つ弥谷温泉を出ると、いきなりの登りだ。初日もバスを降りたらいきなりの登りだったから、驚きはしない。しかし、俳句茶屋を過ぎると、石段が続く。百八階段を登りきると、岩山にへばりつくように建つ大師堂前を出た。本堂はと案内図を見ると、さらに上である。石段が次から次へと波状攻撃のように目の前に現れる弥谷寺はすごかった。本堂までの石段の数は、540段もあった。朝の体操にしては、すこしきつかった。

木々の間から田園風景を眺められる本堂で、息を整えてから般若心経を読んだ。山々に響き渡る感じがした。この弥谷寺は、死者の霊が帰る山といわれており、我々の読経も彼らに届いたに違いない。

石段を降りて大師堂に行くと、ここはくつを脱いでお堂の中でお参りをするようになっている。草鞋の着脱は面倒なのだが、仕方がない。堂内で読んだお経は、建物の周りの岩壁に跳ね返り、読んでいる者の耳に戻ってきた。回向とはこのことだと実感する。団体遍路でお堂があ

ふれるようだったら、地響きのような読経になるに違いない。

腿に応える石段を下り、七十二番曼茶羅寺への遍路道は、俳句茶屋から山腹に沿って分岐する。俳句茶屋は弥谷寺参道のある有名店だが、閉まっていた。古い茶店前の床机に腰掛けて一服なんて、絵になるのだが残念。しかたなしに、休憩なしで歩くことにした。遍路道は、しばし山中へと入り込む。落葉が積もった道は、ふかふかと足にやさしい。竹林の木漏れ日もこころにやさしい。それと対照的な無粋な高速道路のコンクリートをくぐり、讃岐でよく見られるため池のほとりを通って、国道11号に出た。



七十二番曼荼羅寺

国道11号から曼荼羅寺への入り道は、大きな標識でわかりやすかった。ここでも、先頭はさっさと先を急いだ。先を見れば、曼荼羅寺の大き



な標識が見える。しかし、この標識が曲者なのだ。車に乗りなれている人は、その標識ばかりを頼りにしがちだが、歩き遍路は違う。わきに入る小道や路地の入り口と、道端の小さな道しるべを探しながら歩かなければならないのだ。案内の定、後から行くと、軽自動車も通れない路地の入り口に道しるべがあった。先頭はすでにかなり先を歩いている。そこから引き返せとはとても言えず、我々鈍足組は路地に斜めに入っていった。

いきなりのどかな風景が広がり、少し先に曼荼羅寺らしき森が見えた。曼荼羅寺に着いて、先頭の一団をしばし待つ。ようやく着いた先頭の方は、鈍足組が先についているのが腑に落ちないようだった。自動車用の道路標識に案内されると、遍路道の約3倍ぐらい歩かされているはずである。「急がば回れ。」も、ちょっと度が過ぎたようだった。

かつて、庫裏の前にお大師さんお手植の菅笠を伏せた形の松があった。枝を這わせた周囲が30m以上もある見事な松だった。どこを探しても見当たらず、記憶違いかと思ったが、仁

「不老松」も枯れてしまっていた。



王門脇に「不老松」と書いてあったから、ここに違いない。どうやら枯れてしまったようだ。不老であっても、不死ではなく、もし不死だったら、「ふしまつ」と言うのだろう。お後がよろしいようで…。

七十三番出釈迦寺

曼荼羅寺の大師堂脇から境内を出ると、七十三番出釈迦寺へは一直線の坂道である。距離は300mぐらいだろうか。団体バス遍路も、坂の上の出釈迦寺で客を降ろして、下の曼荼羅寺駐車場でバスを待機させる。バス遍路は、先に七十三番をお参りし、七十二番までのわずかな距離を歩かされ、少しだけ歩き遍路の気分を味わうように仕組まれている。この日も、衣装だけはわれわれあるき遍路より本格的なバス遍路の一団とすれ違った。

坂道の途中で振り返ると、讃岐特有の、ため池と平地に無造作に置かれたような小山がぼ

つんぽつんと見える景色が広がっている。前を向くと出釈迦寺の山門越しに、弘法大師が身を投じ





たといわれる捨身ヶ嶽が望める。(左下の写真)

ここ出釈迦寺は、捨身ヶ嶽から身を投じた弘法大師をお釈迦さまが救ったので、のちにお大師さんが像を彫ってまつたという。真言宗の開祖でありながら、大日如来に救われたのではなく、お釈迦様に救われたというのがおもしろく、また人間味を感じさせられる故事である。

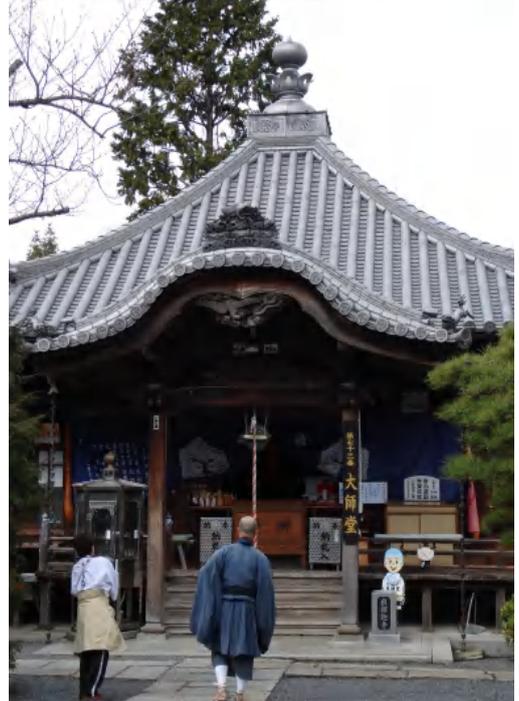
境内はこじんまりとしており、豪壮な客殿以外の建物も小さい。向かって左の本堂前の石段を登ると、奥の院となっている捨身ヶ嶽の遥拝所がある。元気いっぱい道下さんだけが、捨身ヶ嶽にチャレンジした。約1.8キロ、40分かかるといふ。皆、尻込みし、先を急ぐことにした。

山門からの景色を見ると、右の先の方に「讃岐富士」が見えた。正式には「飯野山」という。しかし、讃岐の平地には似たような形の山がたくさんあると思ったら、「讃岐七富士」というのがあるそうで、飯野山が一番秀麗なので讃岐と冠しているのだ。讃岐富士の左手前にも、低い似たような形をした山があり、これが次の札所の山、甲山である。この山の向こうは、善通寺市となり、今回の歩き遍路も最後に近づいて来たことになる。

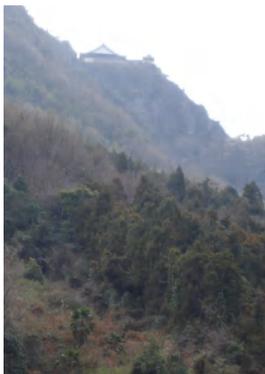
七十四番甲山寺

出釈迦寺を下りて、田んぼの中の遍路道を行ってたどり着く札所は、甲山の麓にある。残念ながら、讃岐七富士ではない。

山の名前をつけて、甲山寺という。由来では、この寺の起源になった毘沙門天の甲冑の形に似ている山の形からついた寺号という。



禅定ヶ嶽



遍路道から来ると、甲山に隠れるように建っているの、すぐにここが札所だと気づかない。札所の案内やのぼりのたぐいもまったくなく、広い駐車場以外は普通のお寺といった感じである。

山門を入った正面に本堂、石段を上ったすぐ左に大師堂、そしてその隣に岩窟の中に毘沙門天が安置された毘沙門堂がある。まだ改修されたばかりの毘沙門堂の木の香がするようだ。

大師堂から石段を下りた所の、通夜堂のような建物の縁側を借りて小休止させてもらった。甲山寺は毘沙門天のお寺であると同時に、子安地蔵のお寺で、本堂と大師堂の間に目立たないように子安地蔵が安置されている。子どもが授かるお地蔵さんという。通夜堂は、子どもを授けてもらおうという人が泊りがけでお参りした



軍用食は遍路食

「カタパン」???

七十五番善通寺への平坦な道は、工場の間や住宅の間、国立善通寺病院の脇などを通り、広い境内の真ん中に出る。左右の境内に挟まれるように、「カタパン」ののれんが目を引いた。店先には、昔懐かしいお菓子のガラスケースが並んでいる。どうやら、この中にあるのが「カタパン」らしい。覗き込むと、ビスケットのような、クッキーのような、煎餅のようなものが整然と並べられている。見た目では甘いものやら、しょっぱいものやらわからない。しかし、女性の嗅覚なのか、これはうまそうという第六感なのか、きく江さんと石川先生がこの店に引っかかってしまった。ガラスケースのカタパンらしきものを何枚と言って頼むと、これまた昔懐かしい薄い白い紙袋に入れてくれる。しょうが味の丸い形の石パンは、百グラム120円だ。後でごちそうになったら、なんとも素朴な、なんとも懐か



名残かもしれない。これから授かる人は、と思って同行を見ていたら、道下さんの姿が見えないことに気づいた。そういえば、「禪定ヶ嶽」にお参りに行った道下さんはまだ姿を現さない。そして、彼には子どもを授かる前に、嫁さんだと余計なことを考えてしまった。どこかに縁結び地蔵とか嫁取り地蔵とかないか。



しい味が口に広がった。創業明治29年、五種類のカタパンを今でも一枚一枚手作りで作っている。昔は、「兵隊パン」と言っていたそうで、日清戦争の時の保存用軍用食料として考案されたものだ。軽くて保存がきいて、ごはんの代わりになるとすれば、山中の遍路食にもGOOD!



真言宗善通寺派大本山善通寺(七十五番)

七十五番善通寺は、真言宗善通寺派の本山であり、弘法大師三大霊場として、高野山、東寺と並び称されているほどの大伽藍である。

先発組に遅れて仁王門前に到着し、左右どちらの境内に行けばいいのか迷っていたら、仁王門前にたたずむ行乞の遍路と思しき人があつちだと指差してくれた。境内は、東院と西院とに分かれており、まずは東院の金堂といわれる本堂にお参りをする。五重塔に向かい合って建っている金堂は、軒先に五色幕が下げられ、



妙心寺の法堂とよく似た雰囲気である。荘厳なお堂の中で、般若心経を読ませてもらった。妙心寺の法堂や仏殿は、お参りに来たものが気楽に入れるようにはなっていないので、開放的な感を受けるとともに、逆にむずむず落ち着かない気持ちにもなった。

本堂を後にして、長い石畳を大師堂に向かう。先ほど道を教えてくれた行乞の遍路は、まだ仁王門前に無言で立っていた。仁王門をくぐると、参道には屋根がかかり、その先で大師堂が迎えてくれる。いよいよ、今回最後の般若心経である。ここも、お堂の中でお経を読ませていただく。堂内が我々の般若心経で満たされる、同時に、今回も無事お参りを終えることができたという安堵感にも満たされた。大師堂を出て砂利の上を歩いてトイレ休憩に向かうと、砂利の音が耳に心地よい。

団体客の記念撮影用の台を借りて、記念撮影に収まり、七十五番を終えた。残すところは十三札所となった。



これは、へんろ稼業の男ではありません。

へんろ稼業の男

「禅定ヶ嶽」に行った道下さんが迷わないようにと、仁王門前にたたずんでいた。向かい側には、くだんの行乞の遍路らしき男が立っている。こちらも乞食僧のようないでたちである。仁王の前に、左右に乞食が立っているような光景は、門前を通る人どう見えたのだろうか。といっても、月曜日でもあり、お参りの人はほとんど通らない。

すると、東院の方から自転車に乗った、これまた遍路風の男がやってきて、向かい側の行乞の遍路に親しそうに話をはじめた。聞くでもなく、網代笠越しに耳に入ってくる話を総合すると、自転車の男はどこか違うところで行乞まがいをしていたらしい。でも今日は実入りが少なく、もう引き上げるという。お前はどうするんだと、向かいの男に聞いている。向かいの男は、それ以外にも仲間がいるらしく、□□はどうしてると聞くと、あれは今日はパチンコ屋らしいと自転車の男が答えた。どうやら、向かいの男も自転車の男も、そして今日はパチンコに行っている仲間も、遍路の格好をした物乞いたちだったのだ。札所にお参りに来る善男善女の善意に付け込んで、いばくかのお金をいただこうと、へんろを稼業としている連中である。

いままであちこちの札所や、中には駅前で、

行乞らしきことをしている連中を目にしてきた。どうも胡散臭い連中だとは思っていたが、今日はそれを目の当たりにした。確かに、昔のあるき遍路は一日三軒の托鉢をするというのが慣わしだったと聞く。浄瑠璃で、「ジュンレイニーゴホウシャヤー」なんていう台詞があったのは、それである。今ではお遍路さんが托鉢をする姿を見ることもない。その代わりに、札所や駅前に立つにせ遍路が目につく。

自転車の男が立ち去ると、向かいの男も仁王門の中に入っていき、くたびれた自転車を引いて善通寺を後にした。帰り際に、向かいの乞食僧に一瞥をくれた。今日は実入りは少ないぞ、とでもいいかげだった。彼らに縄張り意識はなく、場所代を請求されずにほっとした。いやいや、とんでもない、こちらは四国あるき遍路の行脚の僧である。仲間に見られたら心外である。

程なく、遠くのほうから颯爽と歩いてくる青年が見えた。へんろ稼業の男がくたびれた自転車を引いて歩いていく姿と比べたら失礼だが、とにかく颯爽と見えた。「禅定ヶ嶽」からようやく追いついた道下さんだった。これで、全員そろった。そろそろ昼飯の時間である。

善通寺駅に行く途中に、うまそうなさぬきうどんの店があるらしいと、南大門を出た。



締めくくりは「さぬきうどん」

南大門を出て駅に向かう。善通寺の町は、整然と整備され、道路にも緑が多く感じられた。今回の遍路に出発する前に調べておいたうどんやさんは、「清水屋」という。マジシャンは、セイスイさんだが、こちらは普通に「シミズヤ」と呼んでいいのだろう。間口一間半、席数24の店に、23人もの団体が入って大丈夫だろうかと思った。

店に着くと、先客もいる。全員が一度には入れないが、店の人はあわてる様子でもない。これは店のシステムによる。この店のシステムは、カウンターに並んで、自分の注文をいうとすぐにうどんを作ってくれ、その間に代金を支払い、出来上がったうどんはセルフでもらって、空いている席について食べる。客が並んでいても、うどんはすぐできるので、長くても2~3分も待てばうどんにありつける。カウンターの前には、おでんがあったり、天ぷらがあったり、おにぎりやいなりずしも置いてあり、客は好きなものを自由にとって、うどんの代金と一緒に精算をする。食べ終わったお客さんは、「ごちそうさん」といって店を出る。我々が食べている間も、地元の人が入っては出て行きを繰り返し、ゆっくりし

て客の回転を悪くしているのは我々ぐらいだった。このシステムを体感して、「うどんは、日本のファーストフードなのだ。」と思った。

20人もの団体が、そろって店の入り昼食を食べるのは、いままでの道中では難しいことだったが、この日本のファーストフードはそれを可能にしてくれる。これからのさぬき遍路の昼食は、このシステムに決まりだ。それは、かけうどん190円という値段の安さからも間違いない。

店を出たところの交差点から善通寺駅までは一直線である。今回の遍路はここまでで、琴平駅まで行き、琴平から高松空港へと向かうことにした。



お疲れ様でした。





四国を飛び立つときに見えた瀬戸内の夕景です。よく見ると、本四連絡橋も見えています。次回は、この景色を見ながら再び四国の地に足を下ろします。



七十番甲山寺の五重塔。

編集後記

編集作業に手間取ってしまい、第十回のまとめもだいぶ遅くなってしまいました。

少しの空いた時間などに少しずつ編集しましたので、前後のつながりが悪かったり、文の調子が合わなかったりなどはどうぞご容赦下さい。

今回の遍路の素敵な感想は、寺報に掲載した道下さんの秀逸な文にお譲りして、この冊子は私観に基づいた記

録をまとめたものとしてお読みいただければと思います。

足りない部分は、お読みくださった皆様の感想や思い出を行間に埋めながらご覧いただければ何よりです。

なお、編集後の校正や見直しなどはほとんどしておりませんので、誤字脱字などなどございましたら、それもお容赦下さい。

では、次回もお楽しみに・・・。